和光中学校学校通信　*生徒会スローガン「自学豊心 ～前向き・励まし・思いやり～」*

ひかり

令和５年３月24日
第 19 号

「仲間と頑張ることに意味がある。」

日本中を熱気で包んだＷＢＣ（ワールド・ベースボール・クラシック）の第３戦で、日本代表の佐々木朗希選手はチェコ・スロバキアを相手に先発登板し、初回から 160 キロを超える投球を連発してチームの勝利に大いに貢献しました。

この試合が行われたのは、東日本大震災から 12 年経った３月 11 日のことでした。ＷＢＣを前にして行われた宮崎キャンプで、すでに佐々木投手は栗山監督から 3.11 の先発登板を託されていたそうです。

佐々木選手は、震災による大津波で壊滅的な被害を受けた岩手県陸前高田市で生まれ育ちました。震災当時９歳だった朗希少年は、津波で父功太さんと祖父母を亡くし、住む家も流され、隣接する大船渡市に移り住みます。小学４年生の時に地元の野球クラブに入ったものの野球ができるはずのグランドは、震災で住む家を失った人たちの仮設住宅で埋め尽くされ、練習場所もありませんでした。仕方なく河川敷や原っぱでボールを追いかけ、たまにグランドを借りられた時には、50 分ほど歩いて行かなければならなかったそうです。そんな環境の中でも野球に打ち込む日々を送っていました。その後も野球を続け、中学校時代には全国屈指の名門私立高校から何度も入学を誘われるほど優れた投手になっていました。

ところが、佐々木選手が選んだのは強豪校ではなく地元の公立校「大船渡高校」でした。佐々木投手が語ったその理由とは、「地震で大変な思いをした仲間と頑張ることに意味があると思うし、地元にも恩返しがしたい。」でした。震災で何もかも失っても、白球を追い続けたチームメイトだけはいつも変わらず一緒でした。そんな仲間から「みんなで大船渡に行こう」との声が上がったことで、公立高への進学を決意したのだそうです。あと一歩のところで甲子園出場は叶いませんでしたが、目標を共有し、苦楽を共にした仲間との絆は、今も佐々木選手の大きな支えとなっています。

皆さんも震災こそ経験してはいませんが、小さい頃から一緒に遊んだりケンカをしたりしながら多くの思い出を共有してきました。互いがかけがえのない存在です。大人になっても同じ故郷をもつ仲間です。今後和光中で共に過ごす時間は限られていますが、励まし合い高め合っていこうではありませんか。

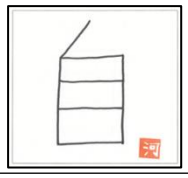
先日、２年生は「立志の決意発表会」を行いました。『どんな人になりたいのか、何を大切にして生きていきたいのか』を漢字１字に込めて発表しました。その姿を見ていた保護者の方々から寄せられたメッセージには次の言葉が記されていました。「皆さんの立志の決意発表、よく考えられていて感銘を受けました。今までの自分自身を見つめ直し、未来の自分を想像して、目標を見つける良い機会になったのではないかと思います。今日の事を忘れず目標に向かって頑張ってください。」たくさんの方に見守られ今の皆さんが在ることを忘れず、今後も成長していってください。ここに決意の一部を紹介します。

これまでは自分に自信がもてずに落ち込んでしまうことがあった。でもこれからは何事も前向きに捉え、自分を認めると同時に好きでいる自分でありたい。そして、いろいろな意見を受け入れ認めていけるといいと思う。

水は生活に必要不可欠で、とても大切な存在だ。

どんな色にも形にも変化できる。

水のように変化しながら成長し、かっこいい女性として生きていきたい。



自分から自主的に行動する。

自分のできる範囲で無理しすぎずに頑張る。

自分に自信がもてるようにするためにいろんなことに挑戦したい。